様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22 年　6　月　1　日現在

研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2006～2008
課題番号：１８４０１０２１
研究課題名（和文）　近世・近代ペルシア語文化圏における言語・民族・国家形成

研究課題名（英文）　The Formation of Languages, Nations and States in Modern Persianate Societies.

研究代表者　近藤　信彰（KONDO Nobuaki）
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授
研究者番号：　９０２７４９９３

研究成果の概要（和文）：
イラン、中央アジア、南アジア、トルコを中心とする 17-19 世紀のペルシア語文化圏に関して、海外調査を行い、資料収集にあたるとともに、現在の各地でのペルシア語文化のあり方とその認識について知見を得た。色濃く残るペルシア語文化の影響も存在するが、一方でナショナリズム的発想も根強かった。その中でオルタナティヴとして「ペルシア語文化圏」という概念の有効性が明らかとなり、今後の研究の発展が見込まれる。

研究成果の概要（英文）：
The research group visited the regions that belonged to “the Persinate Societies,” such as Iran, Central Asia, South Asia and Turkey, and collected materials for history of the regions from 17th to 19th century. We confirmed the strong influence of Persianate Culture in each region, but some native researchers preferred the framework of nation-states in order to understand the history of the regions. Ironically, it shows the effectiveness of the concept of “the Persianate society”, and will help us to organize more larger collaborative research.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	3,400,000	1.020,000	4,420,000
２００７年度	3,200,000	960,000	4,160,000
２００８年度	3,100,000	930,000	4,030,000
２００９年度	3,100,000	930,000	4,030,000
年度			
総　計	12,800,000	3,840,000	16,640,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：東洋史
キーワード：国民国家、言語改革、文化交流

１．研究開始当初の背景

当時、アジア前近代史で注目されている概念に「ペルシア語文化圏」があった。歴史的にペルシア語が文語共通語として用いられたイラン、中央アジア、インドなどをこう呼び、これらの地域の共通性と相違点、ならびに相互の交流の諸相が明らかにされつつあった。しかし、この概念は前近代史

のそれにとどまっており、「ペルシア語文化圏」がその後、どのように変容し、現代に至るのかという視点を欠いていた。

そこで、ペルシア語を文化の共通の基礎におく時期から、それぞれ異なった言語、民族、国家が形成され分断されて行く過程を明らかにすることで、近現代史研究、地域研究にも資する点があるのではないかと考えた。

２．研究の目的

本研究では、「ペルシア語文化圏」という概念をふまえ、これらの地域の近世から近現代（16～20世紀）における変容を明らかにすることを目的とした。

ペルシア語はいわばリンガ・フランカとしてこれらの地域において用いられたわけであるが、一方で、ペルシア語文化圏は言語的な重層性を内包していた。このような普遍性と重層性を併せ持ったペルシア語文化圏は、18世紀以降、徐々にそれぞれの地域が個性を深めていき、さらにロシアとイギリスの植民地化によって分断され、そして言語・民族・国家をそれぞれの地域で形成していくことになる。この過程において、ペルシア語文化圏が持っていた普遍性と重層性はどのような意味を持ち、どのように同時代の人々に認識され、どのように変化させられていったのかを追求することが、最終的な課題であった。

３．研究の方法

現地や欧米において海外調査を通じて、以下の研究方法を採用した。

(1)ペルシア語文化圏が第一には「文語としてペルシア語が用いられたか、あるいはペルシア語に強い影響を受けた文語を使用した地域」であることから、まず文献研究が重要な方法であった。ペルシア語文化圏で生み出された一つの文献類型を、通時的に地域を問わず研究対象として、その変化からペルシア語文化圏の変容を読み解いた。

(2)今日の現地の歴史叙述において、ペルシア語文化圏が以下に扱われているか、という問題を探求した。現地で発行されている研究書の収集、および現地の研究者との意見交換を行った。

(3)今日のペルシア語をとりまく言語の使用状況を調査した。かつてペルシア語文化圏に属していた地域は、口語においても多言語かつ重層的な言語使用構造をしている場合が多い。この調査は二つの目的があった。第一に文献資料では研究することが困難なペルシア語の口語に関する現代の多言語かつ重層的構造を明らかにすることで、過去の口語文化に関する理解を深めた。第二に現在の状況がいかなる経緯で出現したのが、その過程を歴史学と言語学の共同作業によって考察した。

４．研究成果

(1)　以下のように、研究代表者、研究分担者、研究協力者が、海外調査を行った。

2006 年度
・川口琢司　ウズベキスタン、カザフスタン、イギリス
・矢島洋一　トルコ
・渡部良子　イラン
・中西竜也　中国
・近藤信彰　インド、イラン

2007 年度
・守川知子　イラン
・二宮文子　インド
・森本一夫　トルコ、オーストリア
・菅原睦　　トルコ
・近藤信彰　インド

2008 年度
・森本一夫　カナダ
・渡部良子　フランス
・近藤信彰　インド、イラン
・菅原睦　　ドイツ

2009 年度
・近藤信彰　タジキスタン、イラン
・菅原睦　　トルコ

のべ計 12 カ国に計 8 名の研究者が調査に赴いた。

(2)出版物と学会発表、ワークショップ

研究代表者と研究分担者全員が執筆した『ペルシア語が結んだ世界』（図書②）がもっともまとまった成果であり、代表者と分担者１名が執筆した『世界史大系　南アジア史 2 中世・近世』も今後の研究の基礎となる重要な文献である。図書⑨は、テヘラン大学優秀出版賞を受賞した。さらに、報告書の出版を予定している。

研究代表者が企画した国際ワークショップ "The Formation of Perso-Islamic Culture: The Mongol Period and Beyond" が 2009 年 3 月にアジア・アフリカ言語文化研究所で開催され、研究協力者２名が報告を行った。

特筆すべきは国際的な発信であり、研究代表者・研究分担者の国際学会での発表は、４年度で計 14 回を数えた。

(3) 研究内容では、現在の各地でのペルシア語文化のあり方とその認識について知見を得たことが最大の成果である。かつてペルシア語文化圏に属した地域に、ペルシア語文化が色濃く残ることが確認でき、一方で近代的ナショナリズム的発想に基づいて過去を語る現地の研究者も多いこともわかった。インドにおけるペルシア語文化の現在、タジキス

タンにおいて進む脱ロシア語化の政策など、がとりわけ興味深かった。その中でオルタナティヴとして「ペルシア語文化圏」という概念の有効性が明らかとなった。カナダ、ドイツ、フランスから研究者を招いて行った国際ワークショップを通じて、このテーマはさらに国際的共同研究に結びつけられることが明らかとなり、今後のさらなる研究の発展が期待される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 20 件）
①近藤 信彰「イスラーム法と執行権力－－19 世紀イランの場合」　佐々木有司編『法の担い手たち』国際書院　査読無 2009 287-306
②近藤信彰「ペルシア語詩人伝の系譜――韻文学の隆盛と伝播」　森本一夫編『ペルシア語が結んだ世界』北海道大学出版会 査読有 2009　39-66
③菅原睦「中央アジアにおけるテュルク語文学の発展とペルシア語」森本一夫編『ペルシア語が結んだ世界』北海道大学出版会 査読有　2009　131-146
④真下裕之「南アジア史におけるペルシア語文化の諸相」北海道大学出版会 査読有 2009　287-306
⑤真下裕之「インド洋海域史における 17 世紀前半インド西海岸の港市Suratの一側面」『海港都市文化研究』査読有 2009, 43-74
⑤Nobuaki Kondo “Shi'i 'Ulama and Ijaza during the Nineteenth Century,”*Orient* 査読有 44, 2009, 55-76.
⑥ Kazuo Morimoto.“The Notebook of a Sayyid/Sharīf Genealogist: Ms. British Library Or. 1406.” Scritti in onore di Biancamaria Scarcia Amoretti 査読無 vol.3 2008, 823-836.
⑦真下裕之「イスラーム化の史実と伝説：南アジア史におけるイスラーム信仰戦士」共生倫理研究会編『共生の人文学：グローバル化時代と多様な文化』査読無. 2008. 190-214
⑧真下裕之「デリー・スルターン朝の時代」小谷汪之編『世界史大系　南アジア史 2 中世・近世』査読無 2007. 102-134
⑨近藤信彰「ワクフと私的所有権――チャハールダフ・マアスームのワクフをめぐって」『アジア経済』査読有　48-6, 2007, 9-28.
⑩Morimoto, Kazuo “Putting the Lubab al-Ansab in Context: Sayyids and Naqibs in Late Saljuq Khurasan.” *Studia Iranica* 査読有 36-2(2007) 163-183.
⑪近藤信彰「19 世紀テヘランの大バーザール――発展、構成、所有関係」『上智アジア学』査読無　25, 2007,　161-195
⑫菅原睦「『クタドゥグ・ビリグ』から『五体清文鑑』まで　―中央アジア・チュルク語アラビア文字正書法の変遷」『ユーラシア諸言語の研究』査読無 2006 43-62
⑬森本一夫「サイイド／シャリーフ系譜学者の手控帳―英国図書館所蔵手稿本Or. 1406 をめぐって」『史朋』査読無 39, 2007. 55-68

〔学会発表〕（計 19 件）
①森本一夫「前王朝期サファヴィー家によるサイイド血統の主張：新史料の発見とその評価. 九州史学会年次大会. 2009/12/13.九州大学
②菅原睦「中期チュルク語語彙論の展望」第 63 回羽田記念館定例講演会　2009/11/14 京都大学ユーラシア文化研究センター
③Sugahara Mutsumi. “Kutadgu Bilig'in Herat (Viyana) Nüshası ve XV. Yüzyıl Türk Dili” Uluslararası Sempozyum. Doğumunun 990. yılında Yusuf Has Hacip ve Eseri Kutadgu Bilig. 2009/10/26.イスタンブル大学
④Nobuaki Kondo “The Last Qizilbash? The Early Qajar Rulers and their Capital Tehran” International Conference: Turko-Mongol Rulers, Cities and City-Life in Iran and the Neighboring Countries. 2009/9/1 Institute of Oriental Culture The University of Tokyo
⑤近藤　信彰「19 世紀後半テヘランのシャリーア法廷台帳」日本中東学会第 25 回年次大会 2009/5/17 広島市立大学
⑥真下裕之「インド洋海域史における海港都市：17 世紀前半におけるインド西海岸の海港都市スーラトの一側面」国際学術シンポジウム「東アジア海港都市の共生論理と文化交流」 2008/11/27 韓国海洋大学校(釜山)
⑦Nobuaki Kondo. “The Old Friday Mosque and the Waqfs in Tehran” IAS-AEI Conference: New Horizons in Islamic Area Studies. 2008/11/23 Nikko Hotel, Kuala Lumpur
⑧Kazuo Morimoto “Writings of Sayyid/Sharif Genealogists: Different Types, Different Functions” International Seminar “Religious and Political Uses of Genealogies in Islamic Societies” 2008/11/8 Alcala de Henares, Spain
⑨Sugahara Mutsumi, “Tazkira-yi Awliya in the Uyghur script” International Workshop, Studies on the Mazar Cultures of the Silk Road. 2008/8/27. 新疆大学, ウルムチ
⑩Kazuo Morimoto “An Arabic Vocabulary from Late Saljuq Khurasan” The Seventh Biennial Conference of Iranian Studies 2008/8/3 Hotel Park Hyatt Toronto
⑪Nobuaki Kondo, “Shi‘i ‘Ulama and Ijāza during the Nineteenth Century,” 2008/8/2 The Seventh Biennial Conference of Iranian Studies, Hotel Park Hyatt Toronto
⑫Morimoto, Kazuo, “Al-Samhudi an ‘Ilm and

Nasab: A Reading of the Jawahir al-'Iqdayn." Middle East Studies Association 41st Annual Meeting, 2007/11/17, International Convention Center, Montreal.
⑬近藤信彰　「シェイフ・ファズロッラー・ヌーリーのシャリーア法廷台帳」2007 年度東洋史研究大会 2007/11/３ 京都大学文学部
⑭Morimoto, Kazuo "Ibn Funduq and His Milieu: Arabic as a Prestige Language in Late Saljuq Khurasan" 6th European Conference on Iranian Studies 2007/9/22 Austrian Academy of Sciences, Vienna
⑮Morimoto, Kazuo "Ibn Funduq and His Milieu: Arabic as a Prestige Language in Late Saljuq Khurasan" 6th European Conference on Iranian Studies. 2007/9/22 Austrian Academy of Sciences, Vienna
⑯Sugahara, Mutsumi "Contacts between writing systems: Uyghur script and Arabic script in the Islamic Central Asia" International Workshop on "Native" and "Loan" in Turkic Languages 2007/9/18 京都大学羽田記念館
⑰近藤信彰. 「19 世紀テヘランのマドラサとワクフ」日本オリエント学会第 48 回大会 2006/10/29 早稲田大学.
⑱Nobuaki Kondo "Loans in Qajar Tehran: a Study on Bey'-e Shart." The sixth Biennial Conference of Iranian Studies. 2006/8/4. School of Oriental and African Studies, University of London.
⑲Kazuo Morimoto "Putting Lubab al-Ansab in Context: Sayyids and Naqibs in Late Saljuq Khurasan" The sixth Biennial Conference of Iranian Studies. 2006/8/4. School of Oriental and African Studies, University of London.

〔図書〕（計９件）
①森本一夫、山川出版社、『聖なる家族：ムハンマド一族』、2010、106
②森本一夫編著、北海道大学出版会、『ペルシア語が結んだ世界――もう一つのユーラシア史』、2009, 261.
③川口琢司・長峰博之編 菅原睦校閲, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所『チンギズ・ナーマ』, 2008, 186.
④菅原睦 神戸市看護大学『ウイグル文字本『聖者伝』の研究Ⅱ日本語訳および註』2008. 406.
⑤菅原睦 神戸市看護大学『ウイグル文字本『聖者伝』の研究I序論と転写テキスト』2007. 428.
⑥Hiroyuki Mashita ed. Routledge *Royal Asiatic Society Classics of Islam II. The Muslim World 1100-1700: Early sources on Middle East History, Geography and Travel*. 2007. 8vols
⑦モハンマド＝ホセイン・タバータバーイー著；森本一夫訳　慶應義塾大学出版会『シーア派の自画像：歴史・思想・教義』、2007、330.
⑧ジェームズ・ラットレー著 近藤信彰監訳 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所『鮮麗なるアフタニスタン 1841-42――イギリス軍中尉ラットレーの石版画より』. 2007. 191.
⑨Mansur Sefatgol, KONDO Nobuaki. Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. *Persian Historical Epistles from Iranand Mawara an-nahr: The Safavids, the Uzbeks, and the Mangits*. 2006.593

６．研究組織
(1)研究代表者
近藤　信彰（KONDO NOBUAKI）
東京外国語大学・アジア･アフリカ言語文化研究所・准教授
研究者番号：90274993

(2)研究分担者
菅原　睦（SUGAHARA MUTSUMI）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授
研究者番号：50272612
真下　裕之（MASHITA HIROYUKI）
神戸大学・大学院人文学研究科・准教授
研究者番号：70303899
森本　一夫（MORIMOTO KAZUO）
東京大学・東洋文化研究所・准教授
研究者番号：00282703

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者（肩書は当時）
川口琢司（北海学園大学非常勤講師）
中西竜也（京都大学大学院、日本学術振興会特別研究員）
二宮文子（京都大学研修員）
守川知子（北海道大学文学研究科准教授
矢島洋一（京都外国語大学非常勤講師）
渡部良子（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所非常勤研究員）